

## 恐竜

娘の登園時間は午前九時で、園ではいちばん遅い方の時間帯になる。だから娘を引き渡しに保育室に入ると、同じ二歳組の子どもたちはだいたいみんな揃っていて、ももちやんだ、ももちやんのパパだ、とか言いながら近寄ってきたり、それに応えて返事をしたり挨拶をしたりしながら父親は手提げから娘の着替えやマグカップ、食事用の口拭きタオルなどを取り出して所定の位置にセットしていく。娘には空になった手提げを渡して、ロッカーにしまってくれるよう頼むと娘は与えられたその任務に張り切って取り組み、そのあいだ父親の方も準備がスムーズに進められる。もっともそう毎日うまくいくわけでない。父親としてはそういう算段で臨むけれども、思い通りことが進む日の方が少ない。そもそもそれは保育室にたどり着いた時点で娘が泣いたりぐずったりしていないことが前提で、保育室の前で娘の気がのらなければまずはあの手この手でなだめたり、説得したり、場合によったら追いかけてつかまえて無理やり引きずってくることもあったり、逆にこちらが引つ張り回されたりどつかれたりしながら準備をすることになり、程度は日によって違うがむしろそういう日の方が多い。

今日は上々の部類で、娘は保育室に入るとその場でぐるぐるまわりながら、海苔巻きだし、と言う遊びをはじめたので、父親は娘がぐるぐるまわっているあいだに身の回りの品を各所に収めて、出席カードを担当保育士のあかりさんに渡した。娘は保育室にいたもうひとりの担任のみずきさんにぐるぐる遊びを危ないからと止められつつも、そのまま友達たちが遊んでいる輪に入っていき、ももちやんじゃあね、と父親が声をかけてももう振り向かなかった。哀しいが泣いて離れたがらないよりはこれでいい。保育室のドア横のガラスに張り付くようにして廊下を見ていたそうすけくんが真剣な表情で、新幹線、と言いながら手を伸ばしタッチを求めてきたので父親もこれに、新幹線、と応え

てタッチを返して保育室をあとにし、玄関でサンダルを履いて外に出るとふいちゃんが園の前の道路に仰向けで寝ていた。

ふいちゃんおはよう、と声をかけたがふいちゃんはこちらを向かず上を向いたまま  
で、横に立っていたふいちゃんのお父さんとも挨拶を交わし、寝てますね、と言うと、  
寝てるんですよ、とお父さんは言った。

ふいー、と寝転ぶふいちゃんに声をかけるお父さんは、その呼び声にさまざまな感情  
を込める。ふいちゃんのお父さんの額には少し汗が浮かんでいた。ふいー、ともう一度  
繰り返す。マスクで口元が隠れたふいちゃんのお父さんの顔を見ながらもちゃんの父  
親は、と内心で自称して、その呼び声に込められたすべての思いがわかる気がする、と  
続けた。いつまでも付き合っているわけにいかない焦りや苛立ちももちろんあるが、こ  
こで怒ってさらに機嫌をこじらせたり泣き出したりしても事態は好転しない。だから責  
め立てるような響きは慎重に排されてあくまで穏やかに、お父さんは困っているんだよ  
ということが伝わるように、そして娘に理解と行動を求めるべく、頼むというよりは願  
うように呼びかける。ふいー、とお父さんがまた繰り返す。

白線が引かれた路側帯に仰向けに寝ているふいちゃんは、しかしそんなお父さんの声  
にまったく応える様子がなかった。寝ているといっても眠っているわけでも眠そうなわ  
けでもなく、むしろふいちゃんの目はしっかりと開かれ、長いまつ毛も普段よりぴんと  
張っているように見えた。黒目がちなふいちゃんの目玉は動くことなく、まっすぐ空を  
見ていた。

よく晴れて日差しは強めだが、少し風もあって気持ちのいい天気だった。五月は子ど  
もがいたっていなくなたって気持ちのいい季節だったけれど、子どもが生まれて一緒に生  
活するようになると、子連れで屋外で過ごす時間がそれまでよりも長くなり、すると父  
親たちの五月の気持ちよさについての実感もまたちょっと変化した。ただ気持ちいいだ  
けじゃなく、ありがたい気持ちになるのだ。

春先はまだ朝晩に冬の名残の冷え込みがあるが、五月になると夕方になっても寒さをあまり気にしないでいい日が増える。日中の気温の上昇も穏やかで、なにより藪や植え込みの近くにいても蚊がいないから、いまの時期は子どもを外で遊ばせるのにあれこれ心配が少なくて助かるのだった。六月に入ると気温も徐々に上がってきて雨も増えるし蚊も出てくる。子どもと一緒に公園にいと体温が高く汗っばい子どもの体は蚊の格好の餌食で、親は寄ってくる蚊を追い払ったり叩き潰したりに忙しくなり、そもそも虫の多そうなところで遊ばせにくくなる。子どもだけでなく親の方も子連れで外にいる大半の時間は子どもの近くで遊び相手をしたり見守ったりしている時間だから、寒い日は寒いし、暑い日は暑いし、知らぬ間にあちこち虫にも刺される。でも五月はただ外にいただけで、ただ立っているだけでも気持ちいい。そんな気持ちいい季節の晴れた朝だ。道路に寝転ぶのだって気持ちいいだろう。ふいちゃんは四月生まれで少し前に誕生日を迎えた。娘と同じ二歳組で、二歳組といってもその年度の誕生日で三歳になる年だからふいちゃんももう三歳になったわけだ。

こんな気持ちいい季節に毎年誕生日を祝えるなんて、本当に素晴らしいことだ。本当に、と内心で繰り返すこの、本当に、は娘が最近覚えた言い方で、本当にすごいよ、とか、本当に甘いよ、本当に眠いよ、とかい로운な言葉を強調しまくっている。ちよつとタメを利かせた芝居がかった言い方は、たぶん保育園で覚えたんだろう。昨日は公園でふいちゃんが娘と同じ言い方で、本当に恐竜、と言っているのを聞いた。だから園で流っているのかもしれない。娘のがふいちゃんにうつったのかふいちゃんのが娘にうつったのかわからないし、あるいは誰か別の子がどこかで聞いたか、家族の口癖を真似たりしたものかもしれない。園の玄関の掲示板には園内で感染性の胃腸炎とヘルパンギーナ、手足口病が軽く流行中で、それぞれの発症人数が報知されていたが、幼児が集まって日々を過ごす保育園ではウイルスだけでなく語彙や語法や発音も経路のわからないま

ま伝わっていく。言葉以外にも、ちょっとした仕草とか友達に対する立ち居振る舞いとか、あらゆるものが受け渡され、学ばれ、そして試行されている。

そうなんですよ、とふいちゃんのお父さんは言った。ふいもこのあいだ夕方一緒に歩いてたら唐突に、お父さん長生きしてね、って言い出して。どこまで意味がわかって言ってるのかわからないんですけど、そんな物言いいつ覚えたんだろうって思ったんです、と話すふいちゃんのお父さんのマスクがずれて、見慣れない口元が露<sup>あら</sup>わになった。

園では職員や保護者の登降園時のマスク着用は四月から任意に切り替わり、五月の連休明け頃にはマスクを外す保護者もだいぶ増えてきた。花粉症シーズンが終わって気温が上がってきたこともあるだろうし、四月からひと月ほどで特に大きな状況の変化がなかったことも影響していたと思う。自分はといえば、園内では口元にあてていたマスクを玄関から外へ出てあごまでずらしたところだった。ともあれ、この二年間マスクを着けた顔しか見てこなかったひとの素顔というか文字通りの全貌をこうして不意に目にする、勝手に思い描いていた顔と全然違って驚いてしまうことがある。ほとんど毎日のように顔を合わせていたのに急に別人になったみたいで、しかし別人のはずはなく、こちらが長いこと勝手に別人のような顔を思い描いていただけだ。しかしその顔はどこの誰の顔だったのか。

おとなだってそんな具合なんだから、生まれてからこっち家の外では大半のひとがマスクをしている世界で過ごし続けてきた娘やふいちゃんにとって、この春急速に顔面が露わなひとが増えつつある状況はどのほうに受け止められているのか、ちょっと想像がつかない。

園の保育士さんたちも、着用が任意の方針に切り替わると同時にマスクを外して仕事にあたるひとが多かった。そのことを思うと、ちょっと胸がつまるような、涙が出そうな感じになる、とももちゃんの父親は思った。言語での意思疎通がままならないこともある保育の現場では、意思疎通やスキンシップにおいて表情や声に負うところも平時か

ら大きいはずで、マスクで顔の半分が覆われた状態での保育の仕事はきっと相当な苦勞があった。自分が娘を見る限り、保育士さんたちがマスクを外したことへの驚きや反応はほとんど見られなかったが、これはマスク着用でも不足のないよう彼らが娘に接していたからなんだろうともちゃんの父親は考えていた。具体的には技術は素人にはわからないが、たとえばアイコンタクトの仕方や声量や声質の工夫、身振りなどを使って口元が隠れていることを補うための工夫が、制限の多いなかでも日々行われていたのではないか。娘は、この春、保育園で担任のあかりさんやみずきさんが、ももちゃん、と自分の名を呼んでくれるその口元をどんなふうに見ていたのだろうか。

娘の反応の薄さの反面、ももちゃんの父親は方針変更の期日の朝、保育士さんたちが素顔で園内にいるのを見たとき、いたく感動してしまったのだった。マスク着用の科学的な是非は自分には判断できない。あとになって任意に切り替えたのは時期尚早だったとわかる可能性だってあるのかもしれないが、そのときの感動はそういう是非とは関係がない、とももちゃんの父親は言う。光差す朝の園内で、ずっと隠れたままだった保育士さんたちの顔が露わになっているのを見たとき、彼らの三年間の見えない苦勞と努力がネガのように一瞬反転してその光景に現れた気がした。それは彼らの苦勞と努力であると同時に、彼らが娘たちのことを大切に思いやってくれた確かな時間の表れでもあった、とももちゃんの父親は思った。あの瞬間のことは、その是非がたといえかなるものであったにせよ、忘れることはないだろう。

目に見えるひとの顔は隠れているものと現れているものとは現れているものの方が強く、二年間思い描き続けたマックスの下顔たちは、記憶のうえでもほんのひと月足らずであっさりマスクを外した顔に書き換えられていき、はじめは戸惑った誰彼の素顔にも慣れつつあった。そしてマスクの下にあるはずと思い込んでいた顔たちは徐々に思い出せなくなった。誰のものだかよくわからない顔たちが、誰のものだかわからないまま思い出されなくなる。さようなら。

さまざまな対策の有効性について自分たちが証明することはできないのだし、それぞれに得た情報を信じたり疑ったり精査したりして判断するほかないからその判断の有り様は家族構成や仕事やその他いろいろの事情に応じて少しずつ違うものになる。だからそのことをカジュアルに話題に挙げるのはまだなんとなく避ける向きがあった。それでも同じ年頃の子どもを持つ親や家族というのは、感染症の流行がはじまって広がりつつある時期に、母体とその胎内にいる子どもたちをできる限りその危険から遠ざけたい、しかしどうすればいいのかよくわからない、という同じ恐れを共有したひとたちだった。ふいちゃんの両親もきつとあのさなか、自分たちと同じように見えないウイルスを恐れながら過ごしていたのだと思うと、ももちゃんの父親はいつかその不安をみんなで<sup>ねぎら</sup>劳い合いたいと思う。

長生きしましょう、とふいちゃんのお父さんに言うと、ふいちゃんのお父さんは、はは、と笑って、ももちゃんのお父さんも、と言った。お互いに長生きしましょう。そして寝転び続けているふいちゃんにまた視線を落として、ふいー、と言った。

ふいちゃん、ももちゃんもう部屋にいるよ、とももちゃんの父親はふいちゃんに声をかけた。日が違えばふいちゃんとももちゃんが、というかふいちゃんの父親と自分が逆の状況のこともあるからこういう場合は全力で助け合いたくなる。ももちゃんもいるし、そうすけくんもいたし、たもっちゃんもいたし、ちーちゃんもいたし、とももちゃんの父親はさつき二歳組の部屋で見た娘の友達たちの顔を思い出しながら、名前を挙げていった。こうたろうくんもいたし、りんちゃんときんちゃんもいたし、あとはえーつと、指を折りながら十二名いる同じ組の子どもたちのうち、ふいちゃん以外の子の名前を全員呼び上げて、あとあかりさんもみずきさんもいた、と保育士の名前も付け加えた。

ふいちゃんは微動だにしない。

朝起きてから登園まで、つまり親元に娘がいるあいだに多少の行き違いや滞りや衝突がないなんてことはまずなく、それらなるべく未然に防ぎ、生じた問題についてはそれ以上こじらせぬような穏便な解消に努めることで、トラブルを最小程度に抑えたい。とはいえ単にトラブルが少なければいいわけではなく、どんなに順調にことが進んでも園の引き渡しの際に機嫌が悪ければ意味がない。最終段階である保育室への入室、そして保育士さんへの引き渡しに最高の状態で入っていけるよう、あえてわがままやぐずりを泳がせて登園時間から逆算したタイミングまで機嫌をとるのを待つこともある。こちらの思い通りに動いてくれればなんでもいいわけでもなく、物で釣ったりするのは麻薬みたいなもので、使い過ぎると結局それではなくて動いてくれなくなる。これはとりうる選択肢の幅を自ら狭めてしまうようなもので、それは子どもにとっても気の毒だし親の方もあと苦勞することになると思うから、動かぬ娘をお菓子で誘導したりスマホの動画を見せたりするのはよほどどうしようもないときだけにしたい。というのは、いつだったか休みの日に公園でふいちゃんを連れとお父さんと出くわし、娘とふいちゃんが砂場で一緒に遊びはじめたのでその脇であれこれ話しているうちに自然と話題は日々の育児の苦勞話になって、そこで概ねふたりが同じような理念と対処法を心中に掲げていることがわかったときのその骨子である。

それまでは送り迎えのときに顔を合わせて当たり障りのない世間話をする程度の間柄で、立ち入った話をする機会なんかなかったからか、その日のふたりの話はやけに盛り上がり、あとから思い返すとちょっと過剰なほどに互いに共感を表明し、日頃の奮闘を称え合った。細かい部分は我が家の状況に沿う言い方になってしまっているだろうが俺たちは、とももちゃんの父親はあえて俺という一人称で複数形をつくり、俺たちは語らい、そして共感したんだ、と言いたい。

先のような理念を掲げつつも、実際そんな思い通りにいかないから妥協と失敗の連続だ、という実情と歯痒さの吐露もまた、強いシンパシーとともに共有された。まわりを

なんとなく観察していても、自分たちの考えがそう周囲と大きく異なることはないような気がする。どの家庭でもきつと同じようなことを考えては、理想と現実のギャップに悩んでいる。でも重要なのは理念の共通性とか特異性ではなく、それが俺たちのもとで、ふいちゃんのお父さんともちちゃんの父親のもとで共有され、共感されたことだ、ともちちゃんの父親は念を押す。

ももちゃんとふいちゃんは〇歳組からずっと一緒だったから、親たちには同じ道を辿ってきて、そして辿っていくような仲間意識がなんとなく醸成されていたし、どちらも第一子で親にとってははじめての育児だったことも共通していた。ももちゃんもふいちゃんも生まれたときからずっと感染症対策のなかを生きてきたから、保育園の保護者間の交流も自ずと遠慮がちなものになっていて、あの日の砂場の脇で生じたふたりの雑談のなかの静かな高ぶりにはその反動もきつとあった。保育園に限らず、他者と日常的で卑近な話を気軽にするような機会はずっと抑制されてきたのだが、気軽に雑談じゃないと話題に上がらない大事な話題というのがたぶんあって、育児において日々積み重ねられる経験値や試行錯誤なんかもそういう類の話なのかもしれない。

ふいちゃんは依然として道路上で仰向けになって空に目を向け、真剣な顔つきを崩さずにいた。ふいちゃんのお父さんは、ときどき、ふいー、とその名を呼びながら、さっきの娘に長生きしてねと言われた話は実は少し詳細を端折<sup>はしよ</sup>っていて、ともちちゃんの父親にもう少し細かい説明をしようか迷っていた。長生きしてね、という娘の言葉について、どこでそんな物言いを覚えたんだろう、とまるでよくある育児の話のように語ってしまったけれど、実はあれを言われた前日に相模原の自分の実家を家族で訪れ、そこで最近少し体調を崩していた自分の父に向かって妻が、長生きしてくださいね、と言ったその言葉を娘は覚えていたんだと思う。ちゃんと意味をわかっているかは怪しいが、大事なひとをいたわるニュアンスはきつと感じ取っていて、それを父親である自分に向けてくれたのだと思う。それは結構忘れがたい瞬間だったから、いたずらな改変ではない



にしろ、背景の事実を捨象して話してしまったことは、娘に対するちょっとした罪悪感を生じさせた。しかしその背景を話しはじめるなら、話は自分と父親のあいだにかつてあった確執や幾度かの衝突と雪解けを経て現在の、良好とまではいかないがときどき孫の顔を見せに行ける程度の関係性に至った経緯を話す必要が生じるかもしれず、それはいまこの場で説明するにはあまりに煩雑だった。

感染症の心配がもう少し薄れたらもちろんのお父さんを一度飲みにも誘いたい、とふいちゃんのお父さんは思うが、子どもを妻に任せて父親同士が飲みに出るのは実務的にも心理的にもまだなかなかハードルが高く、それが実現したのはこの何年もあることだった。送迎の頻度や服装なんかを見ると、自分も相手も基本的に在宅で仕事をしているように見受けられるが、自分たちは互いがどういう仕事をしているひとなのかいまはまだ全然知らなかった。

ともあれこのひとはだいぶ子どもが好きで、いまでも自分の子の預け入れは済んだのにここにとどまって一緒に路上に寝ている娘を見下ろしている。子どもだけでなく、保育園が好きなのかもしれない。たぶん一年くらい前、娘たちが一歳組にあがって、同じ組の子どもが一気に増えた頃だが、ももちゃんの父親は子どもを預け入れたあと、あとから登園してくる子どもや保育室の外を通りかかる子どもと遊び続けてしまい、なかなか帰らないので保育園からやんわり注意を受けているのも見たことがあった。感染症対策がいまより厳しく、送迎時の滞在時間もできるだけ短くするように言われていたし、対面上は子どもを預けたあとは就業時間になるわけなので、保育園でのんびりしてはまずいわけだ。

今朝の娘は保育園まではずっと変わらず来たのだが、恐竜を見たいと言うのに、恐竜はいない、と応えたのが失敗だった。同じやりとりはこれまでも繰り返されたことがあり娘は恐竜が大昔に絶滅した話を聞くと、恐竜はいる！と主張してときに激怒し、ときに泣き喚き、今日の場合は道路に寝そべって登園拒否の姿勢をとったのだった。いつからこんなに恐竜が好きになったのかもよく思い出せないが、日に日に娘が

口にする恐竜の名前は増え、どこで覚えてくるのか親の自分も聞いたことがないような名前もあり、適当に言っているのかと思って調べて見るとちゃんと実在する名前で、図鑑を見てはいつけんどれがどれだか見分けのつかないようなものも、ちゃんと見分けて正確に名前を言い当てる。最近ではすごいねえと褒めるのを通り越し、その極端な入れ込み具合と知識量がちょっと怖く感じることさえあった。

ゆっくり流れていく薄い小さな雲や、ときどき横切る鳥や飛行機はもちろん、ずっと見続けていれば空の奥の奥、夜にならないと見えないはずの星の影さえも青空のなかに見えてくる。薄い青色の向こうに夜空みたいな暗い広がりがあるのがわかって、あのどこかになにかがいる。お化けもいる。宇宙もいる。そしてたぶん恐竜たちもいる。本に載っている恐竜の名前と形を次々に覚えたのに、本当の恐竜は未だ見ることができない。恐竜はいない、とお父さんもお母さんも言うのだった。あれは大昔の生き物だと言うが、あんなに大きい生き物がどうしていなくなるのか。ふいちゃんのはそれが信じられない。なにか本当ではないことを教えられている気がした。本のなかにはこんなにもたくさんの恐竜がいて、平気そうにしているのに、恐竜がどこにもいないというのはなにかがおかしい。いないわけじゃなくて、電車や車で簡単に見に行けるような場所にいないというだけで、どこか遠くにいるってことなんじゃなか、とふいちゃんはさつき思った。だったらそう教えてくれればいいのに、連れて行けとせがまれたら困るから、どこにもいないなんて言う。ふいちゃんはまだ知らないことはたくさんあるが、数少ない知っていることのひとつは、どこにもいないものなんてない、ということだ。恐竜でも、人間でも、誰でも、必ずどこかにはいる。そんなの当たり前のことじゃないか。恐竜がいないなんて嘘はあまりにその場しのぎの詭弁<sup>きべん</sup>である、とふいちゃんは思っていた。たとえば、と道路に寝転んでみる。遠くて行けないならその遠さを地面から離して空に向けたらいい。

考えてみれば空だって、そこにあるようでどこにあるのかよくわからないもので、しかし空がないなんていうひとはいない。夜になると空の奥から暗い方の空がじわりじわりとせり出てきて、星の輝く夜空になる。あれもまた恐竜の類かもしれないし、あの暗い宇宙というらしい夜の空の一角の広がりはどこかに恐竜たちがうようようよ草を喰<sup>は</sup>んだり、襲ったり襲われたりしながら暮らしている。あ、イグアノドンだ。晴れた空に目を凝らせばそれが見えるかと思ったら、やっぱりちよつと見える。あ、プテラノドンも見えた。宇宙も、恐竜のいる星もずっと見ていとだんだん見えてくる。いるいる、ティラノサウルスもいるし、ブラキオサウルスも、ステゴサウルスもいる、本当にいる、本当に見える。恐竜に長生きしてほしい。

空高く見つめ続けながら恐竜の名前を唱えはじめた娘の横にしゃがみこんで、ふいちゃんの父さんは、たしかに二億年前に地球上に現れてやがて絶滅した、なんてそんな話をどう説明したらいいのか本当のところはわからない、と思った。

イグアノドン。

いるいる、いたよ。

トリケラトプス。

トリケラトプスもいた、二歳組の部屋に来てた。

アンキロサウルス。

いたいた。二歳組の部屋で遊んでた。だから行ってみなよ。

ももちゃんのお父さんがいい加減なことばかり言ってくるが、保育園には恐竜はいない。保育園に恐竜がいたら大変なことだ。そんなこともわからないのか。そんなこともわからないと思っているのか。空の向こうにいるのが、やっと見えたところだ。いまここから動いたら見えなくなりそうだから。今日は一日ここでこうしている、ここで恐竜を見ている、とふいちゃんは思った。

しかし、今日は遅番だったらしい保育士のゆみさんが通勤してきて、ふいちゃんおはよう、一緒に行こう、と声をかけるとふいちゃんはさっきまでのこっちゃんぐ膠着状態が嘘のようにすっと立ち上がってお父さんを顧みることもなく玄関から園内に入っていく、さっさと保育室に向かって歩いていった。ふいちゃんのお父さんはももちゃんの父親に、すいませんじゃあまた、と会釈をするとふいちゃんを追いかけて玄関に向かった。

（滝口悠生著「恐竜」二〇二五年、河出書房新社、『たのしい保育園』所収）